

ハイブリッド!

エスノグラフィー

ネットワークコミュニケーション

NC研究の

質的方法と実践

木村忠正 著

新曜社

Hybrid Ethnography

Qualitative method and practice of network communication research

Tadamasa Kimura



毎日10万単位のコメントが投稿されるニュースサイトのビッグデータ、場所や時間を共有しないオンライン交流のログなど、〈現代〉を分析する民族誌には方法論的革新が不可欠である。

定性・定量の両面から、多時的・多所的なデータを分析した、複合的エスノグラフィーの集大成!

ネットワークコミュニケーション

NC研究の

質的方法と実践

ハイブリッド！ エスノグラフィー

Hybrid Ethnography

Qualitative method and practice of network communication research.

Tadamasa Kimura

木村忠正 著

新曜社

ハイブリッド・エスノグラフィー



目次

I

ネットワークコミュニケーション／エスノグラフィ／
ハイブリッド・エスノグラフィ

第1章 ネットワークコミュニケーション研究 10

- 1-1 「ネットワークコミュニケーション」 10
- 1-2 本書が対象とする「ネットワークコミュニケーション研究」 15
- 1-3 技術の社会的形成——本書における技術と社会との関係の捉え方 16

第2章 ネットワークコミュニケーションの特性 20

- 2-1 5つの軸 20
- 2-2 関与者数 21
- 2-3 クローン増殖性と記憶・再生・複製・伝播様式 22
- 2-4 時間軸・空間軸における離散性・隣接性 25
- 2-5 「物理的存在」（オフラインの存在）

／「論理的存在」(オンラインの存在)と社会的手掛かり 28

2-6 秩序形成への欲求とメディアオーディオロギアの形成 31

第3章 NC研究におけるエスノグラフィーアプローチの展開 33

3-1 エスノグラフィー・質的研究への高まる関心 33

3-2 人類学におけるNC研究 37

3-3 サイバーエスノグラフィー研究 41

第4章 「ヴァーチャル・エスノグラフィー」と「デジタル人類学」のあいだ 47

4-1 「エスノグラフィー」の危機 47

4-2 「ヴァーチャル・エスノグラフィー」 49

4-3 「ヴァーチャル・エスノグラフィー」と「デジタル人類学」のあいだ 52

4-4 エスノグラフィー革新の必要性 57

第5章 デジタル世界における対称性の拡張

——知識産出様式としてのエスノグラフィー革新の方向性 60

5-1 デジタルメソッド 60

5-2 知識産出様式における(対称性(シンメトリー)の拡張 67

5-3 デジタル空間における「定量／定性」の対称性と「フィールド」概念の変容 69

5-3-1 デジタル空間における「定量／定性」の対称性 69

5-3-2 SNA・ネットワーク科学とエスノグラフィーとの接合

——「定性／定量」対称性方法論として 76

5-3-3 「干渉型参与観察」特権化の瓦解 84

5-4 「ビジネス／学術」の対称性 89

5-4-1 CUDOSからPLACE 89

5-4-2 ネットワークに埋め込まれる人々の活動とIT企業 92

5-4-3 「ビジネスエスノグラフィー」と「デジタル人類学」 95

第6章 ハイブリッド・エスノグラフィーの方法論的基礎 101

6-1 リサーチプロセスから規定する「エスノグラフィー」 101

6-2 「アブダクション（仮説生成的推論）」——エスノグラフィーの中核的力 106

6-3 「ヒューリスティクス（発見法）」——HEの中核的力 109

第7章 ハイブリッド・エスノグラフィーの具体的遂行と課題 115

7-1 エスノグラフィー調査の具体的遂行過程 115

7-2 つながりとしての「フィールド」とサイバーエスノグラフィー・アプローチ3類型 119

7-2-1 つながりとしての「フィールド」 119

7-2-2 焦点となる「つながり」からみたサイバーエスノグラフィー・アプローチ3類型 121

7-2-3 論理的存在／物理的存在の分離がもたらす方法論的課題 124

7-3 調査倫理 127

7-3-1 ケアの原則 (principle of care) 127

7-3-2 調査研究許諾の確認と説明——研究機関および参加者の必要性 131

7-3-3 関係形成のダイナミズム 136

7-4 フィールドワークにおけるデータ収集法 139

7-4-1 観察、インタビュー、保存記録 139

7-4-2 インタビューの多元性 141

7-5 質的／量的をいかに組み合わせるか——HEにおけるMMの具体的展開法 145

7-6 HEが展開される空間 148

7-6-1 NC研究の多層性・多元性 148

7-6-2 NC研究の重層的空間 151

II ハイブリッド・エスノグラフィーの実践

第8章 VAP (Virtual Anthropology Project)

——ソーシャルメディア利用の日米デジタルネイティブ比較 158

8-1	VAP (Virtual Anthropology Project) とデジタルネイティブ研究	158
8-1-1	VAd (Virtual Anthropology Project)	158
8-1-2	「デジタルネイティブ」論と「デジタルネイティブ」概念の脆弱性	159
8-1-3	日本社会において「デジタルネイティブ」研究の持つ意味	162
8-2	HEとしてのVAPリサーチデザイン——3つの観点	165
8-3	デジタル現在 (digital present) —— 観察・アーカイブ・インタビュの融合	169
8-3-1	デジタル現在 (digital present) —— HEにおける「民族誌的現在」の革新	169
8-3-2	VAPにおけるデジタル現在 (digital present)	172
8-4	TML (Translational Multi-Level) デザイン	
	—— インフォーマント集団をより大きな社会文化集団に定位する方法	178
8-4-1	アンケート調査との並行・継起デザイン	178
8-4-2	VAPでの実践	179
8-4-3	TML (Translational Multi-Level) デザイン	
	—— 定性調査の弱点克服とウェブ調査のバイアス	183
8-5	VAP-V (北米調査) —— 社会文化間比較に拡張したTMLデザイン	188
8-5-1	VAP-Vのリサーチデザイン	188
8-5-2	国際比較、異文化間比較研究	190
8-5-3	VAP-Vにおける日米ウェブ調査モニター・インフォーマントの偏り	192
8-6	TMLデザインによる日米比較	196
8-6-1	インターネット利用全般	196
8-6-2	ケータイメール・SMS利用の規範意識、気遣い	200

8-6-3 ブログ・BBS・SNS——情報発信・交流・自己開示 202

8-7 SNS利用と社会的ネットワーク空間の構造 204

8-7-1 日本社会におけるSNSの普及——せめぎ合う3つの「つながり原理」 204

8-7-2 「世間」の支配力 209

8-7-3 対人関係空間の構造 215

8-7-4 SNSの考古学 227

第9章 ワイヤレス・デバイド——ユビキタス社会の到来と新たな情報格差 230

9-0 本章の位置づけ 230

9-1 データ通信カードと「モバイルデバイド」——本章の主題 231

9-2 デジタルデバイド研究 232

9-3 データ通信カードの普及 234

9-4 グループインタビューによる定性的調査 235

9-5 ウェブアンケートによる定量的調査 239

9-6 「魚の目」の重要性 245

第10章 ネット世論の構造 246

10-0 本研究の問題意識と主題 246

10-1 日本社会における「ネット世論」の形成回路とYahoo!ニュースの位相 248

10	111	ニュース産出流通回路の変革	248
10	112	「ネット世論」Ⅱ「拡散」「炎上」の図式を越える必要	251
10	2	本研究データの概要	254
10	3	投稿者識別IDクラスタリング	258
10	4	投稿者ID-IIPアドレス、親コメント-子コメントとの関係	263
10	5	非マイノリティポリティクス——「ヤフコメ」に通底する社会心理	271
10	51	PRSに現れるネット世論の関心	271
10	52	投稿者マジョリティに現れるネット世論の関心	275
10	53	非マイノリティポリティクスと道德基盤理論	282
10	6	ポスト・リベラルの社会デザイン	289
おわりに			
参考文献			
索引			

316

312 295

装幀
荒川伸生

はじめに

本書は、ネットワークコミュニケーションに対して質的研究、エスノグラフィーの観点からアプローチする方法論を展開するものであり、次の3つの関心領域が重なり合う地点における筆者の調査研究活動に立脚している。

- (1) ネットワークコミュニケーション研究(CMC
[Computer-Mediated Communication、コンピュータ媒介
コミュニケーション]研究)とそこでの質的(エスノグラ
フィー)アプローチの果たす役割
- (2) 質的研究、エスノグラフィーに関する方法的議論
(他／多分野におけるエスノグラフィーへの関心の高まり
と人類学における懐疑・模索)
- (3) デジタルネットワーク拡大に伴う方法的革新、とくに、
(〈定性〉〈定量〉)を対称的に扱い、複合的に調査、分析
を行う方法論(これを本書は「ハイブリッドメソッド」と
呼ぶ)の必要性。

筆者は、文化人類学という質的研究こそが生命線である学術分野で専門教育を受けたが、偶然の巡りあわせに導かれ、インターネットが社会に普及しはじめた1995年前後から、インターネット研究に取り組むこととなった。人文・社会科学分野ではインターネット研究が未開拓の揺籃期にあたり、文化人類学は、ある社会文化を、文化的規範や表象・意味・価値体系、行動様式、慣習といった文化的側面だけではなく、法制度、経済活動、技術、心理なども含め、多面的に理解しようとする学術領域であつたため、筆者の研究もまた、ヴァーチャル・コミュニティのような社会集合的現象、ネットワーク利用行動、オンラインコミュニケーションの社会文化的側面だけでなく、政策、法制度、デジタル経済、eラーニング、社会心理と多元的、複合的に展開してきた(木村 1997, 2000, 2001, 2004, 2007, 2008, 木村・土屋 1998など)。

しかし、サイバースペース(オンライン空間)という人類にとつての新たな活動空間をフィールドとする文化人類学として、学術的関心の中核には、生活世界における人々のコミュニケーション、つながり(ネットワーク)があり、SNS(mixi、Facebookなど)が普及を始める2000年代半ばからは、SNSを中心とするネットワークコミュニケーションを含み込んだ生活世界の研究に積極的に取り組んでいる(木村 2012a,

2012b, 2015, 2016a, 2016b, 2016c, Kimura 2010b, 藤原・木村 2009)。その取り組む過程で直面した大きな課題が「方法論」であった。

ネットワークコミュニケーションの機能、構造、特徴などに関する研究は、主として、社会心理学、社会言語学、情報科学などが学際的に関与するCMC研究として、広範囲にわたり活発に展開されている。^[1] CMC研究は学際的だが、主流である社会心理、社会言語、情報科学系の場合、量的分析が基本となることが多い。利用有無、時間、動機、目的、効用、態度、感情、タスク遂行などに関する従来型の定量的調査や実験心理学的手法だけでなく、コミュニケーションがデジタル化されていることから、計量テキスト分析やネットワーク分析などの量的分析が急速に発展を遂げている。さらに、これらの分野では、CMCという表現が含意しているように、CMCを対面コミュニケーション(HtF: face to face)と対照させ、CMC自体の特性を明らかにしようとする傾向が強い。

他方、方法的に文化人類学を特徴づけ、その中核となるのがエスノグラフィである。第3章で詳細に検討するが、エスノグラフィは、従来のアナログ世界を前提とし、調査協力者と調査者とが場所と時間を共有する「参与観察」(調査者が協力者の生活世界に参加、関与しながら、観察する調査法)とい

うフィールドワークの方法を基礎としている。こうしたエスノグラフィという方法により、CMCにいかにか文化人類学はアプローチできるのか。CMCにおける「参与観察」をはじめ、サイバースペースというフィールドにおけるエスノグラフィは、従来のアナログ世界を前提とした方法論を根底から問い直す必要が生じる。さらに、文化人類学的アプローチの場合、CMCと対面コミュニケーションを対立させるのではなく、両者を含みこんだ生活世界を掘り下げて理解しようとするベクトルも強く働いたため、CMC研究という枠組みを超えた方法論が求められる。

そこで、CMC研究に関心を持つ文化人類学者、エスノグラフィ的アプローチに取り組むCMC研究者たちは、方法的議論を積み重ねてきており、「オンラインエスノグラフィ」(Markham 1998, 2005, Gatson 2011)、「ヴァーチャル・エスノグラフィ」(Hine 2000)、「サイバーエスノグラフィ」(Robinson and Schulz 2009)、「デジタル人類学」(Hurst and Miller eds. 2012)、「デジタルエスノグラフィ」(Murthy 2008, Pink et al. 2016)など、多様な展開を見せている。

本書は、こうしたCMC(本書では第1章で議論する理由から基本的に「ネットワークコミュニケーション」と概念化する)研究における質的研究(とくにエスノグラフィ)からの

アブローチという学術的文脈に位置づけられる。しかし、上述の多様な方法的議論を踏まえながら、本書が「ハイブリッド・エスノグラフィ」と異なる新たな概念を提起するのは、デジタルデータにおいては、〈定性的データ〉〈定量的データ〉という垣根が取り払われ、常にデータを〈定性的〉、〈定量的〉どちらの観点からもアブローチする必要が生じていること。したがって、ネットワークコミュニケーション研究においては、もはや「エスノグラフィ」が質的調査だけに留まることはできず、定性、定量をいかに組み合わせるか、そのダイナミクスが重要であるとの認識にもとづいている。

このように、本書のいう「ハイブリッド」は、第一義的に、〈定性〉と〈定量〉とのハイブリッドである。だが、それだけに留まらない。デジタルデータは、エスノグラフィをアナログ世界において不可欠であったフィールドワーク、参与観察の「同時性・同所性」から解放するとともに、ログデータにより調査協力者に干渉せず（非干渉的に）、観察することを可能にする。すなわち、本書は、時間軸、空間軸において可塑的で、「多時的」「多所的」という意味においても、「干渉型」(obtrusive)・「非干渉型」(unobtrusive)を組み合わせるという意味においても、「ハイブリッド」な方法としてエスノグラフィを捉えることになる。

しかし、〈定量的〉で、参与観察ではないエスノグラフィがエスノグラフィなのだろうか。本書は、デジタルデータがもたらす知識産出様式の変化に対応し、ネットワークコミュニケーションを対象としたエスノグラフィはまさに、「ハイブリッド・エスノグラフィ」である必要があると主張する。むしろ、同時・同所性を必然とする参与観察の頸木から解放することにより、「エスノグラフィ」の中核的価値がより明確に現れる。それは、「フィールドワークにもとづき、可能な限り先入見・先験的枠組を排し、多元的事象を対象として、きめ細かく意味生成の文脈に即して掘り下げ、理解・解釈しようとする、仮説生成・発見的方法論」と規定することができる。

デジタルデータが流通するネットワークコミュニケーションにおいて、「フィールド」は根底から変容する。したがって、「フィールドワーク」自体が、定性的、定量的、多時的、多所

「1」 学際分野である「コミュニケーション研究」に関わる学会で最も大きなICA (International Communication Association) の基幹をなす学会誌の1つである *Journal of Computer-Mediated Communication* (JCMC) は、無料で公開されており、CMC研究の現状を知るのに最適である [http://online.library.wiley.com/journal/10.1111/\(ISSN\)1083-6101](http://online.library.wiley.com/journal/10.1111/(ISSN)1083-6101)

的、干渉的、非干渉的とハイブリッドに展開しうる。仮説検証ではなく、仮説生成的、発見的であるがゆえに、膨大なデジタルデータを定量的に構造化する作業と、個別の文脈（個々のネットワーク行動者とその行動）を参照し、意味生成の文脈に即して掘り下げ、理解・解釈する質的研究とを並立させ、複合させることが可能となる。

以上が、本書第I部で展開する議論の基盤となる問題認識と大きな枠組みである。それを踏まえ、7章からなる第I部の構成を概観しておきたい。第1章では、CMC研究ではなく、「ネットワークコミュニケーション」研究と概念化する意味とともに、「技術」と「社会」に関する本書の基本的な立場（関係主義にもとづく技術の社会的形成という立場）を説明する。第2章は、ネットワークコミュニケーション研究の基本的論点を整理している。本書の読者には、ネットワークコミュニケーション研究の専門家も多いと思うが、エスノグラフィ論、質的研究法、定量・定性の複合方法論（Mixed Methods）に主たる興味があり、ネットワークコミュニケーション研究に馴染みのない読者も少なからずいると想定する。他方、第II部の各章をはじめ、本書は、ネットワークコミュニケーション研究におけるエスノグラフィーとして、ハイブリッド・エスノグラフィーを具体的に議論、実践しており、馴染みのない読者に本書の

理解に最低限必要とされる論点をまとめた。

こうした前提を踏まえ、第3章では、先述のようなネットワークコミュニケーションに対するエスノグラフィーからのアプローチについて概観する。それとともに、「質的研究」、「エスノグラフィー」に対して、多様な学術分野、さらには、ビジネスからも強い関心が寄せられていることを示す。ネットワークコミュニケーションは、デジタルであることから、定量的アプローチに適している。さらに、SNS、スマートフォン（以下、「スマホ」と表記）の普及により、人々の行動、選好、思考、感情に関する膨大なデータ（ビッグデータ）が利用可能となり、億単位のデータを対象にしたデータ収集、分析手法の革新も目覚ましい。それにもかかわらず、ネットワークコミュニケーション研究においても、エスノグラフィーへの関心が高く、多様な議論が展開しており、IT企業でも人類学者が研究者として重要な役割を果たしている。それは、いくらビッグデータとはいえ、ネットワークに接続している際のヒトの行動、思考、心理や社会文化的文脈には、ログに回収されない面も多く、文脈に即したきめ細かい質的研究もまた不可欠だと認識されているからである。

こうしたエスノグラフィーへの関心の高まりは、文化人類学として歓迎すべきことではあるが、他分野、ビジネスからの関

心には、ややロマンティックで、短慮な期待にもとづいていると思われる面もある。フィールドワークをすれば直ちにきめ細かい文脈が理解できるわけではもちろんなく、エスノグラフィは決して万能薬でも、成功を約束された方法でもない。実際、文化人類学内部では、1980年代後半以来、エスノグラフィという方法論と実践が、深刻な批判的課題に直面してきている。むしろ、サイバースペース、デジタルデータ、ネットワークコミュニケーションは、そうした課題をより先鋭な形で投げかけ、エスノグラフィ自体を問い直す大きな契機と捉えられるのである。

このような認識をもとに、第4章では、STS研究者であるHineによる「ヴァーチャル・エスノグラフィ」と、文化人類学者であるMiller、Horstらによる「デジタル人類学」を対照して議論することで、ネットワークコミュニケーション研究の観点から、エスノグラフィという方法論が直面している課題を明確にする。その核心にあるのは、デジタルデータとオンライン空間がもたらす「フィールド」の変容である。つまり、アナログ世界における一定の地理的空間と人々の活動により境界づけられる「フィールド」ではなく、空間、活動、境界、すべてが絶えず流動的なオンライン空間においてエスノグラフィという方法をいかに実践するかが最も大きな課題なのである。

この課題に対して、第5章は、デジタルデータとオンライン空間が、研究対象としてだけでなく、データ生成、収集、分析方法として、従来のアナログデータ、オフライン空間と異なる論理を持つことにより、知識産出様式自体を変容させ、エスノグラフィは新たな知識産出様式に適応することで、革新すると議論する。ネットワークコミュニケーションのフィールドは、データ自体を常に「定性」「定量」両面から対称的に見ることが必然であり、異なる時間・空間が併存し、「干渉型」に囚われない「非干渉型」観察が可能な空間である。「定性」「同時・同所」「干渉型」という軀からエスノグラフィを解き放つ方法論として、「ハイブリッド・エスノグラフィ」というプログラムを構想する。

「定性」「同時・同所」「干渉型」という特性を失うことで、私たちは、エスノグラフィのもつ中核的価値をより明確に把握することができる。第6章は、その中核的価値を、理論とデータとの推論的關係が「仮説生成的 (abduction)」、「発見的 (heuristic)」であると規定し、それぞれの側面を、Peirce、Abbott、McGrathらの議論にもとづいて掘り下げていく。

第7章は、それまでの議論を受け、ネットワークコミュニケーションに対するハイブリッド・エスノグラフィを、リサーチデザインとして遂行する過程に沿って具体的に検討する。エ

スノグラフィーは決して整然とした体系をなす方法論ではない。暗黙知的要素も多く、フローチャートにもとづいた手順化や方法の定型化などの形式化、体系化を拒む方法論である。しかし、本書は、ハイブリッド・エスノグラフィー的調査研究に取り組んでみようとする大学院生、若手研究者も読者として念頭においており、第7章では、可能なかぎり形式知として定式化することを意識しつつ、具体的に遂行する過程で生じる方法論的課題を、方法論的多様性と調査倫理の観点から議論することで、ハイブリッド・エスノグラフィーを実践するイメージを提示したい。

第Ⅱ部を構成する第8章から第10章では、ハイブリッド・エスノグラフィーの実践である調査研究とその知見を報告する。第8章は、デジタルネイティブ（1980年生以降とここでは定義する）を対象とし、日米で取り組んできた調査研究プロジェクト（VAP: Virtual Anthropology Project、ヴァーチャアル人類学プロジェクト）である。第Ⅰ部の議論は、このVAPを実践し、進展させながら具体化したものであり、筆者がこれまでに取り組んだ調査研究のなかでは、最も包括的に多岐にわたりハイブリッド・エスノグラフィーを展開したものである。SNS利用について、拙著『デジタルネイティブの時代』（木村 2012a）での議論を日米比較により深化させている。

第9章は、「デジタルデバイド」の観点からみたモバイルインターネットの利用に関する調査研究である。定性調査にもとづきフレームワークを構築し、定量調査を実施するという典型的な定性・定量の組み合わせ（《継起デザイン》）であり、企業での調査などにも適用可能な面があるだろう。

第8章、第9章が、オンラインを含みこんだ生活世界を、オンラインでの調査を基盤に掘り下げていくのに対して、第10章は、「Yahoo! ニュースコメント機能のコメントデータをもとにした「ネット世論」に関するオンラインエスノグラフィー的調査である。非干渉型観察により、ビッグデータと文脈に即した解析をいかに組み合わせるか、テキストマイニング、ネットワーク可視化、ウェブアンケート調査を駆使しながら、道德基盤理論にもとづいた仮説生成に取り組んでいる。

本書は、第8章で議論するVAPを基点にしているが、VAPの開始は2007年度に遡る。10年に及ぶ調査研究と試行錯誤から本書の議論は生み出されたことになるが、その過程では、数えきれない方々からのご厚情、ご協力、数多くの研究助成、共同研究の機会をいただいた。エスノグラフィーをはじめ、質的、量的問わず、社会調査は人々の理解と協力なしには成り立たない。手間のかかる作業を含むVAPには、日米で延べ14

8名の方が参加してくださり、本書で議論しているアンケート調査への協力者は、やはり日米で延べ1万人を超える。VAPの実施、道徳基盤理論に関連した社会調査についてはKDDI総研（現KDDI総合研究所）、ネット世論研究に関してはYahoo! ニュースにご協力を仰ぎ、煩瑣にもかかわらず、快く計り知れないお力添えをいただいた。ご協力いただいたお一人おひとりに、心より深謝申し上げます。

主要な研究助成としては、「サイバー・エスノグラフィーの方法論的基礎に関する調査研究」（2007―2009年度科学研究費助成研究・基盤研究(C)）、「エスノグラフィーにもとづく情報行動研究」（2007年度国際コミュニケーション基金（現KDDI財団）研究助成）、「定性・定量融合法（mixed methods）にもとづく「デジタルネイティブ」の日米比較」（2012年度（財）電気通信普及財団研究調査助成）、「定性・定量融合法（mixed methods）にもとづく日中「デジタルネイティブ」の政治意識、グローバル化意識とネットワーク行動に関する調査研究」（2014年度（公財）村田学術振興財団研究助成）があり、共同研究には、「通信サービスにおけるユーザの行動調査および行動モデル構築のための分析手法の検討」（2009―2011年度KDDI研究所）がある。各助成機関、共同研究パートナーにも、本研究を推進する機会をい

ただいたことに、心よりお礼を申し上げます。

ここに記したように、筆者は、IT企業と協働する機会が数多くあり、第5章第4節の知識産出様式における「ビジネス／學術の対称性」、「ポスト学術科学（postacademic science）」に関する議論を真剣に捉える契機となっている。社会心理学者の亀田達也は、『モラルの起源——実験社会科学からの問い』（亀田2017）の冒頭で、「教育学部や文学部を対象に、文系の学問が社会の役に立っていないのではないかという批判が、ここ数十年ほど、政府や産業界を中心に表明されて」（ibid.: i）きたと指摘し、「人文社会科学の危機」に抗し、文系の「豊満さを取り戻すための道筋」を描くためのチャレンジとして実験社会科学を捉えると主張している。

筆者も亀田と同様の危機感を共有しており、本書もまた、文系の豊満さを取り戻すためのチャレンジと位置づけることもできるだろう。社会学分野では、2010年代に入り、ようやく本格的に「デジタル社会学」が議論されるようになってきているが（第5章第1節参照）、Gregoryらは、「デジタル社会学」が必要とされる契機について、次のように議論する。

過去40年にわたり、社会学者たちは、方法的革新を主導してきた。とりわけ、無作為抽出標本調査と深層面接法において。

…(中略)…ところが、こうした調査法は、社会的世界を理解するにはますます役に立たなくなっており、社会学者たちは方法論的「危機」(Savage and Burrows 2007)に直面している。こうした方法の価値が失われていくことは、社会学者が「社会的なるもの」について特別な知識を主張することがもはや不可能であることを意味する。(Gregory et al. 2016: xxiii-xxiv)

文化人類学、社会学は19世紀、近代社会の形成とともに誕生し、近代化の過程で発展してきた学術領域である。それはアナログ世界における(ポスト)産業化、都市化、植民地主義などの展開を理解するための概念装置であり、調査方法として定性、定量の各種社会調査法、理論的には研究者の観察、内省にもとづいてきた。ところが、デジタルネットワーク、オンライン世界の拡大、機械学習、人工知能の革新的進展は、情報学的転回^[2]とも呼ぶうる、ヒトと社会を理解する概念装置、枠組みを根底的に塗り替える可能性を高めている。

ネットワークコミュニケーションは社会的日常生活に深く浸透し、今後も進展する。文化人類学、社会学をはじめ、人文社会科学は、デジタルネットワーク世界とそこの／それを含みこんだ生活世界、ヒト、社会文化を理解するための新たな言語、概念、方法が求められているのではないか。このような文脈に

において、本書は、文化人類学徒としてネットワークコミュニケーション研究に対する方法論的探究を続けた、10年来の苦闘の結果である。浅学非才ゆえ、至らない部分も多いと思うが、1つでも多くの気づきを読者に提示することができればと願っている。

[2] 「情報論的転回」(informational turn)について、筆者はいまだ体系的に議論できるだけの知見を持たないが、「情報」という概念がヒトのあり方を探究する上で基底的であり、システム理論、サイバネティクス、情報理論などに源流をもち、「情報」概念を掘り下げながら、ヒトのあり方を問い直す学術的営為をここでは「情報論的転回」と呼ぶ。Adams 2003, Floridi 2011, Gleick 2011, 吉田 2013, 西垣 2005 (西垣は「情報学的転回」(informatic turn)と呼ぶ)などを参照。

I

ネットワークコミュニケーション／

エスノグラフィー／ハイブリッド・エスノグラフィー
